

はしがき

本書は、冷戦終結後の紛争に関心を持つ読者を想定した紛争解決学のテキストです。2025年現在、国際社会にはウクライナ戦争、イスラエル・パレスチナ紛争、ミャンマー内戦、コンゴ紛争など多数の紛争が発生しています。スウェーデンのウプサラ紛争データプログラム（UCDP）では、世界で発生している紛争を、「一方の主体が国家のもの」が59件、「武装勢力など非国家主体のもの」が75件、「政府や組織化された集団による文民への一方的な暴力行使」が42件としています（2023年現在）。死者数のデータを見ると——これがどれほど厳密かは論争があり、その数値はむしろ下限値ではないかとの批判もありますが——、2022年には世界で約31万人、23年には同15万人が紛争の犠牲になっています。いままさに世界は、第2次世界大戦以後、最も紛争を抱え、そして犠牲者を生み出す時代に突入しているわけです。

悲惨な現実を前に私たちは、そして国際社会はどういった対応できるのか。切迫した問いが眼前に現れています。本書の読者もそうした関心を持って本書を手にとられたことと思います。本書は、読者のこうした疑問に答えるために執筆されたものです。

本書は、学部生や大学院生、紛争に関心がある一般読者を想定していますが、限られた紙幅の中で、より多くの知識や理解を読者に提供するために、読者が国際政治の基礎知識を持っている前提で話を進めている部分があります。学部生で言えば、専門科目を受講する3年生以上、つまり既に国際政治の理論や歴史について学んだ読者層を想定しています。スムーズに読了できるように分かりやすい説明を心がけましたが、国際政治学や国際政治史、比較政治学などのテキストを併せて読むと、理解がいつそう深まると思いますので、やってみてください。

さきほど「分かりやすい説明」と言いましたが、これは単純化や結論ありきの議論ではありません。紛争解決学のテキストという本書の位置づけからして、「このようにすれば紛争は解決できる！」という明快な議論を期待してい

る読者には残念な事実を伝えなければなりません。見方によっては、本書は国際社会が「紛争解決のためにこれだけのことができる」という処方箋を提示するのではなく、「これだけのことしかできない」と示す本かもしれません。あるいは、本書を通して、むしろ読者は「紛争解決が決して容易ではないこと」を理解するかもしれません。

本書は、紛争への対応を考える以上、紛争がどれほど複雑で対応が困難なのかについても、大前提として理解しなければならないと考えます。紛争は複雑な経緯で発生しており、その複雑性を理解することなく、対応することはできないからです。その意味で、まず現実を冷静に見ることが必要です。本書が紛争の発生や激化、再発などのメカニズムを理解し、各地域の紛争の多様な特徴も押さえ、国際社会の対応の限界と可能性も直視しようとするのは、このためです。

本書の執筆者の多くは、大学で平和研究や平和政策など紛争解決学に類する講義を担当しているか、あるいは国際政治学などの講義の中で紛争解決に関する内容を扱っています。ここ数年、凄惨な紛争が続き、多くの罪のない人々が犠牲になっている中で、受講者も真剣な眼差しで講義を聞いてくれています。そのような中で、私たちが紛争の複雑性や対応の困難さを語ると、明確な「答え」がすぐに提示されないことに学生たちは、少しヤキモキするようです。コメントカードに「結局、どうすれば良いのですか」との質問が書かれることも少なくありません。紛争に対する国際社会の対応、いわば紛争解決に対する本書の評価がどのようなものなのかは、読者の皆さんも気になると思います。それをまとめるならば、以下のようになります。

つまり、本書の立場は、やみくもに国際社会が努力すれば紛争は解決すると理想主義を語るものでも、紛争解決が困難であるから対応も所詮限定されるのだと悲観主義に陥るものでもありません。紛争への対応が困難を抱える現実を理解した上で、国際社会は、紛争に対する最善の対処を模索し、現在も試行錯誤を重ねています。それを理解する必要があるというのが本書の姿勢です。

解決が困難であることを理解した上で、悲観的になるか、希望を見出すのかは、私たち次第です。たとえば、本書でも紹介する予防外交など、紛争の未然防止策については、その必要性は誰もが認めるところですが、成功例が少ない

といわれています。ですが、本書の第5章執筆者の打ち合わせにおける言葉を借りれば、「私たちが知らないだけで、多くの人の努力によって紛争が予防されているのかもしれませんが」。未然に予防されれば、表面化しませんので、予防したアクターが自分たちの成果だと喧伝しない限り、私たちは知らない（→起きていない、成功していない、とみなされる）ことはあり得ます。「現実」をどう解釈するのも私たち自身に委ねられているといえるでしょう。

本書は、紛争解決における明確な処方箋や解決策を必ずしも明快に提示していないとは述べましたが、「答え」を求めることは当然放棄していません。むしろ、読者と共に「答え」を模索したいと、編者らは考えています。紛争が大きな問題になっている現在、紛争解決の「答え」を探すことは、紛争当事者、現場で紛争解決に汗をながす外交官や国際機関の職員、NGO 関係者、紛争地の実情を世界に発信するジャーナリスト、本書の執筆陣のような研究者はもとより、読者の一人ひとりにも求められていると思うからです。

最後に、日本で紛争解決学を学ぶ意味と、紛争解決における日本の役割について少し触れたいと思います。紛争解決学は、欧米が発祥の学問です。ですが、まさに、その欧米的な価値・規範、考え方が、時に紛争地から反発を招くことがあります。そうした中で、日本から紛争解決学を学ぶことは、こうした見方と一定の距離を保つことができるという強みがあります。

日本は、幸運なことに第2次世界大戦後、他国の紛争に介入したり、他国と戦火を交えたりすることなく、現在に至りました。このような紛争における当事者性の欠如は、一方で、紛争を現実味のあるものとして我々が認識することを難しくさせているという問題もあります。このことは場合によっては、紛争を常に「対岸の火事」と考え、主体的に知ろう、学ぼうとしないことにつながりかねません。

しかし、もう一方で、他国の紛争に介入したり、他国と戦火を交えたりしていないという歴史的実事が、日本を中立性、公平性、そして信頼性のある仲介者や調停者たらしめているとも言えます。たしかに日本は、他国と異なり、紛争解決において原則的に軍事力を行使できない（国連PKOによる部隊派遣を除く）という特徴があります。しかし、本書で見ていくように紛争解決という国

際社会の紛争地への取り組みには、幅広い分野があります。人道、平和、開発という3つの分野いずれにおいても日本は、リーダーシップを発揮できる国なのです。

本書は、構想から刊行まで4年近くを要しました。2021年7月に編者の富樫と法律文化社の田引勝二さんが面談し、紛争解決に関するテキスト企画が持ち上がりました。富樫は、旧ソ連地域を中心とする紛争研究に長年取り組んできましたが、理論研究者と地域研究者を執筆陣に加え、紛争のメカニズムも考察するような書籍が求められていると常々感じてきました。このような背景には、同じように紛争を研究していても理論研究者と地域研究者の間にはなかなか対話がなく、さらに紛争そのものを研究する紛争研究者と、紛争への国際社会の取り組みを研究する平和（構築）研究者の間にもそれほど対話がなかったからです。

この企画を地域研究に軸足を置く富樫だけでやるのは無謀だと思い、平和研究に関する知見が豊富で、富樫の問題意識もよく理解してくれている中村さんに相談したのが8月です。その後、年末にかけて2人で企画を具体化させ、2022年3月に田引さんと3人で会議をしました。こうして企画は走り出したのですが、編者らの能力不足もあり、本書の問題意識や構成を生かした章立て、あるいは、各章について専門的知見をお持ちの執筆陣を探す作業に手間取り、執筆依頼は2023年5月と大幅に遅れました。

2023年8月以降に各章の概要（ハンドアウト）を作成してもらい、2024年に入って初稿、2025年の年初にかけて第2稿、そして最終稿の提出をお願いしました。国際社会において紛争が激化する中で、執筆者の多くは、各所への対応や仕事が増えて多忙でしたが、そのつどオンライン会議で打ち合わせし、問題意識を共有しようと努めました。また執筆に際しては、相互の原稿にコメントを入れる体制で臨みました。これは、本書の議論に一貫性を持たせ、関連づけるために取り組んだことですが、この過程で、編者から多数のコメントを入れて、各章の執筆者の皆さんには大変なご苦労をおかけしました。また逆に各章の執筆者の皆さんから貴重なコメントを頂き、編者らも原稿をより良いものにする機会を頂きました。こうして本書の刊行をみたわけですが、構想から4年間もの間、編者らと500件以上のメールのやり取りを重ね、常にサポートして下さった田引さんに感謝をします。

本書執筆の過程では、様々な方にご協力いただきました。埼玉大学の草野大希さんは、日本平和学会のパネルで本書の執筆陣がテキストの構想について発表した際に、国際関係論のテキストを编者としてまとめた経験から有用なアドバイスをくださりました。また東京大学大学院の田島詩映莉さんは、第1章のグラフの元となるものを作成してくださいました。同志社大学の富樫ゼミに所属する石田智哉さん、甲斐瑞己さん、後藤未来さん、敷田拓士さん、杉山瑞紀さん、樋口蒼刀さん、そして東京大学の中村ゼミに所属していた大前いぶきさん、岡嶋美杜さん、岡田智七永さんは、最初の読者となり、誤字脱字のチェックや、学生目線の感想を伝えてくれました。他にも、一人ひとり名前を挙げることはできませんが、各章の執筆に際して、有用なコメントをくださった多くの方々に感謝致します。

最後に、国際社会が模索し、あなたや私が求める紛争解決の「答え」を探す歩みの中で、本書が「良き羅針盤」、あるいは「良き伴走者」となることを願っています。

2025年4月14日

编者を代表して 富 樫 耕 介

〔追記〕

本書刊行を前にして、共著者である五十嵐元道さんが2025年4月29日に逝去されました。五十嵐さんが執筆された予防外交は、まとめるのが難しい章の一つで、執筆者をどうするかは大きな問題でした。编者らが議論した際に、真っ先に名前が挙がったのが、五十嵐さんでした。五十嵐さんに依頼すると、即座に快諾してくれ、原稿は誰よりも早く提出してくださりました。本書の打ち合わせでも、積極的にコメントをくださり、编者らは大変助けられました。五十嵐さんから頂いた最後のメールには、本書が「非常に充実した内容になり、本当に嬉しい」という言葉がありました。五十嵐さんの貢献なくして、本書は実現しませんでした。記して感謝をし、ご冥福をお祈り致します。

執筆者一同